

# サムイ島からアンコール・ワット（完）

## ラッフルズ・ホテルが開業

いよいよアンコール・ワットだ。もう何回目になるだろうか。最初の時のような時めきはやや薄れてきてはいる。しかし、今回は、前回、シュムリアップを離れる時、あと数日後にオープンすると聞いた素晴らしいホテルに泊まるという別の楽しみがあつた。

もう十数年も続いている夕食しながらの気ままな会合、「かいのかい」の席に石澤先生をお招きし、アンコール・ワットの話を伺いしたことがある。その際、大先輩のSさんから「すごいホテルがアンコールにできた。そこに泊まってみなければ！」と勧められた。それが「グランド・ホテル」だ。

しかし、いくら説明を聞いても、

最初に泊まつた、それも石澤先生たちが定宿としている「バイヨン・ホテル」のイメージが強くしみ込んでいるもので、ピンとこない。夜九時になれば電気は止まる。風呂はあるけれど、小さなガス湯沸かし器では、ぬるいシャワーをチョロチョロと浴びるのがやつとだ。ゆつたりと浴槽に浸かって一日の疲れを癒すなど想像できない。

でも、これが一番のホテルだつた。これが基準になのだから、何と説明されても、「すごい」と言われても実感がわからなかつた。



馴染みの旅行社の人も、まだ行つたことがないという。S大先輩の発言を裏付けた人は周りにはいなかつた。もちろん石澤先生も出来なかつた。いまだに「バイヨン・ホテル」にご執心だし、「グランド・ホテル」は、お茶を飲みに行つたぐらいで、詳しいことは分からぬといふ。

とにもかくにも、何事も「百聞は一見にしかず」である。

バンコックからアンコール・ワットのあるシムリアップの空港まで直行便が一日数便も飛ぶようになり、便利になつたのは驚きだつた。空港も以前のように客引きや物乞いでごつた返してはいない。目障りな軍人の姿も消えている。間違いなく社会の地殻変動が始まつていた。カンボジアに来る時には、日本国籍を持つカンボジア人の経営する現地の旅行会社の人を雇うことにしてゐるが、その人たちの様子もすっかり明るいものに変わつていた。

## ラッフルズ・リゾート

その彼らに「グランド・ホテル」について尋ねてみたけれど、立派だというだけで要領を得ない。どうもホテルには専属のガイドがいて、「グランド・ホテル」の宿泊客は、彼らにとつては商売の対象にはならないらしい。それに彼ら自身が格が違うという扱いをされているらしく、ロビーに入ること自体にも多少抵抗があるようだつた。

実際、ホテルに一歩入つた途端に、ガイドたちが要領を得なかつた理由も合点した。勝手に新築の高層ビルを想像していたのだけれど、建物そのものは以前からあつたもので、やや拍子抜けしたけれど、建物の中は別世界だつた。従業員たちは一様に小綺麗な服装で、態度もきびきびしている。しかも愛想良くて丁寧に対応する。サムイ島の「ロイヤル・メリディアン・バーン・タリン・ガム」も、バンコックの





「オリエンタル・ホテル」  
も顔負けである。内装が凝つていて、年代と風格を漂わせる。広々とした空間に並べられた優雅な応接セツト。手すりの付いた大理石の螺旋階段。パリの古い格式のあるホテルなどで見かけた古風な鉄格子のエレベータ。その前で、にこやかに立っているエレベーター・ボーアイ。何もかもが磨き上げられている。もちろん冷房もきつちときいている。突然、異次元の世界に迷い込んだようだつた。

そもそものはずである。部屋に案内され、パンフレットを見れば、なんと、あの「東洋の貴婦人」とも言われるシンガポールの「ラッフルズ・ホテル」の系列ホテルだつた。「ラッフルズ・リゾート」と銘打つて、インドネシアやスペインなど各地に展開中で、その第一号が「グランド・ホテル・アンコール」のようだつた。

「ラッフルズ・ホテル」アルメニア人のサー・キーズ兄弟が一八八六年に始めたもので、サマセット・モームなどの作家や各国皇族あるいは映画スターなど多くの有名人が定宿とした。ホテルの名前は、シンガポール発展の基礎を築いたジャマイカ生まれのイギリス人の植民地経営者、ラッフルズ卿、Sir Thomas Stamford Raffles（一七八一～一八二六）にちなんだものだという。ラッフルズ卿の略歴は以下の通り。一七九五年ごろイギリス東インド会社に入社。一八〇五年、マレー半島のペナンに赴任。書記として勤務するかたわら、マレー文化の研究に没頭。一八一一年、ジャワ副総督に就任、一八一六年まで、独自の主張に基づいて住民保護を考慮した植民政策を実行。帰国後、『ジャワ誌』を刊行。一八一七年、スマトラの副総督として再度アジアに赴任。一八一九年には、新しい根拠地としてシンガポール島をジョホール王国から獲得し、ここを自由港として経営しするなど革新的な政策を実施。しかし、社内で強い批判を受け、健康を害したこともあり

つて一八二四年に帰国。帰国後、政治家を志す一方、博物館や学会の創設に動いたが、一八二六年脳卒中で急死。開業百年を迎えた一九八六年から二年半、ホテルを休業し、全て取り壊し、設備類を一新。内外装はもちろんのこと調度品などもすべて復元し、一九九一年、完全リニューアル・オープンした。

## 生ガキ、フォアグラそれにワインとブルーベリー

どうせなら上のクラスの部屋に泊まりたくなつた。それで交渉したのだけれど、驚いたことに上のクラスから順次、満室になつていた。「仕方ない……」と、二階の中クラスの部屋で諦めあきらめた。それでも部屋に入ると、調度類もなかなかのもので、風格があつた。驚きの連続だつた。



プールのある中庭に面した部屋だ。ベランダから外を見るとプールの向こうに果てしないカンボジアの森林が続く。荷物をほどくのもどかしく、大きなバスタブに湯をたっぷりと張つて汗を流す。それから備え付けの小綺麗な浴衣を羽織つて、ほど良い堅さのキングサイズのベッドに大の字に横になる。ゆつくりと回転する天井の大きな扇風機から送り出されてくる風が心地よい。何もかも信じられなかつた。

一息ついてからロビーで待つてゐる上智大学アンコール遺跡国際調査団長の石澤先生と落ち合う。今回も先生に甘えて、数日間、おつき合いをお願いたからだ。時間が時間だったので、夕食をとりながら滞在中の予定を決めよることにした。

今日はクリスマスだ。「グランド・ホテル」のレストランもスペシャル・メニューを用意しているという。フランス料理のスペシャル・メニューもあるという。エスニック料理に辟易へきえきし始めていたので迷うことなくフランス料理にした。テラスに陣取りメニューを見ていると、きちんと身なりのホテルの責任者が挨拶に来た。なんと石澤先生が定宿としているバイヨン・ホテルの元従業員だつた。「グランド・ホテル」のオープンに伴い、引き抜かれ、シンガポールの「ラツフルズ・ホテル」で訓練を受け、それから、責任者として配属されたのだという。言われてみれば、確かに見覚えがあつた。しかし、見違えるほど立派に変身していた。

カンボジア、それもシュムリアップでフランス料理でもあるまいと思うだろう。ところが、これが驚くほど絶品だつた。心地よい風が吹いている。昼間の暑さが嘘のようである。彼に勧められるままに、生ガキやフォアグラから始め、キングサーキンのステーキなどを食べた。ボルドー産の「サン・テミリオン」の赤ワインを楽しみながらだ。それにデザートでは生のブルーベリーも出た。

若い頃、フランスに留学し、そこでアンコールの権威に師事した石澤先生とは、ことの他ご満悦だつた。

ボルドー産のワインはブルゴーニュ産と違い、数種のぶどうを混こんじょう釀じようしてつくられる。そのため味わいは複雑で纖細で、しかもエレガント。ボルドー地方の中でも特に知られているのはメドック、クラーヴ、ソーテルヌ、サン・テミリオン、ポムロールの五地区——ワインもそうだが、何事にも一家言ある友人のSさんなら、きっとこんなことを口走るに違いないのだが、石澤先生は「やあ、良いですね。ここでこんなに美味しいサン・テミリオンを味わえるとは……」と、顔を赤らめニコニコするだけだつた。

(余談だが、この同年齢の友人Sさんの博識ぶりには舌を巻く。仕事に絡んだことから趣味に至るまで、頭の中がどうなつているのか分からぬ。その彼の誕生日に、とつて

おきのカリフォルニア産の赤ワイン、「オーパス・ワン」を持参したところ、彼は負けまいと秘蔵の白ワインを振る舞つた。しかし、前口上の割には、味は今ひとつだった。渋々、彼も認めた。だが、おかしくなるくらいに悔しそうだつた。そんな純なところが、なんとも言えない彼の良さである。）

ここ「グランド・ホテル」では、必要なものは何もかも産地直送で、フランスから輸入しているという。だから生ガキも安心して食べられる。もちろんサービスも良い。しかも、それでいて東京で食べるのと比べて、半分以下、多分三分の一ぐらいいの値段だ。長い植民地政策の経験があるのでだろうけれど、ともかくヨーロッパの連中の徹底ぶりには改めて舌を巻いた。

## 建築物の基軸は東西それとも南北

先生には申し訳ないのだけれど、最近は、遺跡もさることながら、カンボジア社会そのものの変化を肌で感じたいという欲求の方がだんだん大きな比重を占めるようになつてゐる。そんなもので、明日からの予定の話などすっかり忘れてしまい、雑談に興じて遅くなり、ともかく明日九時にホテルで落ち合いましようとだけ決めて別れる羽目になつてしまつた。

翌朝、ニコニコしながら、いつものベスト姿で石澤先生が現れた。聞けば、ちょうど一週間ぐらい後に予定されていた故小渕総理のアンコール・ワット訪問の説明役をすることになつてゐるという。「それじゃあ、今回は、その予行演習になりますね！」などと減らず口を叩<sup>たたき</sup>きながら、挨拶もほどほどに、待たしておいた車に乗り込んだ。堰<sup>せき</sup>を切つたようにまた話しが弾む。

アンコール遺跡の修復を一生の仕事としたいという石澤先生との出会いにも話が及んだ。思い起こせば、僕も石澤先生も大手術を乗り越えた直後のころだ。そろそろ十五年が経つ。本当に「光陰矢のごとし」である。

「疲れているでしようから、今日は、あまり無理をしないで、午前中にいくつか見て、午後からアンコール・ワットに行って夕日に映える姿と見というのではどうでしようか」



「良いですね！ 夕日の中に浮き上がるレリーフは最高ですね！ 今回も、とくに予定は立てていません。のんびりと雰囲気に浸れれば、もうそれで十分です。それにしても、何もかも、もの凄い勢いで変わっていますね」

こんなやりとりから始まつて、いつものように莊厳なアンコール遺跡に見とれ、のどかな田園風景に小さい頃の想い出をダブらせ、地元のスペイシーで素朴な料理に舌<sub>したづみ</sub>鼓<sub>づ</sub>を打つ。

こんな時の流れを忘れるような日の連續だつた。これ以上の贅沢はないだろう。



生から興味深い話を伺つた。日本大学理工学部教授で専門は建築史。「韓国の建築文化」（南洋堂）、「日本文化の原点の総合的探求」（日本評論社）、「アジアの仏教名蹟」（雄山閣）、「文化遺産の保存と環境」（朝倉書店）などの著書があり、アンコール・ワットの正門に通ずる石畳の参道の修復に取り組んでいる先生である。

ところで、今回、上智大学アンコール遺跡国際調査団のメンバー、片桐正夫先

久しぶりの再会の挨拶に時間を費やすのも惜しいかのように、片桐先生は、直ちに故小渕總理の訪アンコール・ワットに備えて用意した資料を使つて、参道の修復方法などの説明を始めた。セメントで固めてしまふ歐州諸国の「野蛮」な方法ではなく、当時の技術を出来る限り再現し、それもカンボジア人の技術者を養成しながら、崩れた参道の左側を修復する試みだ。カンボジア人の心の拠り所である遺跡の修復はカンボジア人の手で行えるようにしなければならない、そのためには技術移転と人材養成が不可欠だ……そんな上智大学アンコール遺跡国際調査団の「信念」に沿つて進められている活動である。

その片桐先生が、ところでと、「アンコール・ワットなど東南アジアの建築物の基軸は、中国や日本と違つて、南北ではなく東西が基本になつてゐるんですよ」と話し始めた。熱帯地方では、太陽の位置が高く、「日の出と日の入り」の場所を特定するのが容易だ。だからアンコール・ワットなど熱帯地方の古代の建築物は基軸が東西になつてゐる——そんな説明だつた。

片桐先生が、棒きれで地面に描く図を見ながら、改めてなるほどと思つた。しかし、ホテルに戻つてから説明を反芻する<sup>はんすう</sup>と、それは別に熱帯地方に限らない。中国や日本でも東西を基軸にした方が楽に違ひがない。それなのに何故、中国や日本では南北を基軸にしたのか、どうしても釈然<sup>しゃくぜん</sup>としない。

それで翌日、片桐先生にお会いした時に、その素朴な疑問を話した。

「いや——、そうなんですよね。実は、本当のところはよく分からぬ。あえて言うとすれば、中国では古くから南北を指す磁石が使われており、それで中国文化の影響の強い韓国や日本では南北が基軸になつたのではないでしようか。それもあくまでも仮説ですがね……」

そんな答えが即座に返つてきた。これもまた、なんとなく説得的である。だが、どうも時間的な関係が判然としない。やはり疑問が残つてしまつた。ちなみに小学

館の「日本大百科全書」によれば、「磁石の歴史」とか「羅針盤（コンパス）」については、次のように書かれていた。

●磁石が鉄を引き付けることは古くから知られていた。古代ギリシアでは怪力の神ヘラクレスの名をつけ、磁石を「ヘラクレスの石」とよんだといわれる。ローマのルクレティウスは『物の本質について』で磁石の反発力に触れている。古代中国では針に方向を与える石としても知られていた。……磁石は実用的に用いられることはほとんどなく、むしろ物を動かす磁石には靈魂があると信じられたり、ニンニクによつてその力は失われるとされ、呪術・秘術的なものとされた。古代中国では占いに用いられ、やがて方位を知る道具として使われ始めた。紐でつるした磁石や、腹に磁石を入れた木製の指南魚などが記録にある。これが十一世紀ごろアラビア人によつてヨーロッパに伝わり羅針盤となる。……

●コンパスの始まりは紀元前十一世紀ごろ中国の周代につくられた指南車であるといわれていた。しかしこれは、回転しても一定方向をさす機械的な齒車装置であつて、磁石を使つたものではないとされ、コンパスの元祖であるという説は否定された。……磁気コンパスは、散見される記録によると、十一世紀の初めに中国でつくられ、十二世紀の終わりごろにはヨーロッパに伝えられていたらしい。初期のコンパスは、針を磁石でこすつて磁化させ、この針を紐で吊るしたり、針を藁に刺して水に浮かべたりして北を検知したものと思われる。十三世紀になるとコンパスはかなり発達し、方位の目盛りもできてきたようであるが、コンパスとしてのいちおうの形をなしたのは十四世紀に入つてからである。

.....

なんだかんだと言つても、最近は、マーケットをうろつくのが楽しみになつている。初めてシュムリアップに来たころは、地元の人たち相手の雑貨屋よりも観光客相手の雑貨屋が幅を利かせていた。しかし、最近はまったく違う。地元の人たち向けの雑貨や食料品で溢<sup>あ</sup>れている。調味料や香辛料、野菜や果物、魚や肉など、自然の恵みの豊かさには目を奪われる。珍しい果物や野菜や川魚などが、所狭<sup>とこりせま</sup>しと山積みにされている。それらを囲む、キラキラと目を輝かし、生き生きとしている人たちの熱気でマーケットはむせかえつていて。



この地で長年にわたつて殺戮が繰り返され、何十万人もの人の命が失われた。しかも、かなりの数の人たちが栄養失調で命を落としたとは、とても想像が出来ない。飢餓で苦しんでいるアフリカなどの諸国と比べて、本当にアジアの多くの国々は恵まれていると思った。同時に、改めて、アジアの底力を感じた。二十一世紀は、アジアの時代だろうという思いを強くした。

二〇〇〇年春 伴 友貴